



秋農書上



有也お乳給ふも似す三日の月
とほ蕉翁むじは地
杖と実さひし時
大骨根如能院よその
句也去さし五十年れ
回忌ありあひり(天)

竹地より一丘と築き
る向ふ其句と志等
不の靈とよましく長く
道忠恩代報一は乃
徳と謝と心とを察

寛保癸亥年十月

立茶房

七十二行 一人一章
順次圍 翁

芥也あゝ余も似す之乃月

心し此秋も又古の煉色 立茶坊

氣遠るありハ盤と何りりて 反喬舎

一彦出よりりてありき紫 石龜

浮出ハよけ色とぬハ危満らせ 志等

かふんこさるけけし此昼飯 海宇

洗ハれぬさき小結の具れ子序白 杉更

うらと明ケるや風、吹也じ 蒼龜

ウ 漸いも石理山寺れ 鐘の声 赤頂

振指さしておれと 臆病 阿文

借とのやおれと 御織も 級不 甫千

降るせよ山さ 雲らしく 不二

鼻れさ記きて 入海志村らり 菊鬼

百身安らふと 山 孟 可竜

吟度す 夢の空がくつわらり 露狂

あつりし せ思し 鞠も 好也 龜 大 山

出急さし 今初月れ 事なれハ 野蝶

よなふし 孔虫も 換音 秀家

向ふく又 おきし 秋乃 旒 拾可

ねにおとむく 初瀬れ 観音 桐之坊

おとせく 宗きんのを、 花の 波 暗竹

おけ 哉 不考し ありし 野 近交

長き日と一日をり暮たハ言 流東

うらまてふれ人れ入ル時 扇二

船場と出むふ化可れ借印さ 助幸

うれハ叫々事て あらふ 市紅

障子ハ大キれ鼻志 氣法師 其友

琴子ハも染ッてふいそやり侃 清洲 琴五

此筋と通水ハソウも糸方なり 子箱

よそりもせずふ急く者病 路十

古用前走せく吳く照おり 珠小 臥室

一之輪け 猿走り 同 義孔

脚のくくろ一扉一きり夜。堂 紀六

西川小似ハ笠ハ借上 左長

月れおとま一ふしハ鳴啼て 笠都

り一芦の穂れ七ふ吹く 傘下

字次ハ毛見れ遠志待合と 巴石

何とぞ知れず 持ハ志ハく 一ノ宮 柗等

三

究塔小ハハミカク仰てらんさ降 三巻

初大山しつ所々吾歌 とき庭 悟一

君盡りなまことらんれさ山背て 可静

馬よものりけ智籠も新らん 今五

前あすく川も名なき古銭場長條 柎桂

腰折なりく一首はくし心 青死

十年よ之座とほ色懸けよの月 蘓文

椽側ハハく冷る 花との 一字

新鶯麦とやを養生をゆさる也 李川

了のを何ハ瀟ふししてくく 以亭

花虫咲くちハ隠居も山屋發 八龜

人よもかけすく番茶つむ 壺大

三 茶よん原をうて春をささき 芦吉

思ハハくぬけし大山の芝居見 至静

穂青古切ををの矢はハ常あくる 古所

手あくる年丸角装うく川江戸 芦色

等盤了之案とらしく店りら 左萩

芭此花ハ大王寺 大山 周之

初智小あさこ袖と振くんせ ト陽

らしく出きれ亮てハある 金童

燭此走ん年れ凡此吹あそ 江戸 五明

廊下此相了月とわろく 以鄰

广此考あれハ位西の役やら 有之

翼ぱりあふ切岸の上 六阿

子共よも御所此をぬ小けき 風子

涉ハあ一や川涉子此糸 嵐百

^三仕合も身て片りの日和了て 江戸 車足

仲人と先了筆筭也持 同 五雲

年齢了不信好もれ忌油 李選

祝ケもゆれ連哥堂 文箕

うりくや志そわろあてハ物と 似水

奏方了空て振了案 朔二

峰崎くむありて塚も成能院 采布

小春忠みより松北大房柘 竹節

五葉坊

かれすと色枯野の爰に五十年

あまもよふ向志初霜乃花 秀露

悟すえさ人う侍子とまてさせく 市紅

笈ひうちりハよい扉おや 晴竹

宵に暈をんて月乃晴とる^ウ 甫子

芦に穂日けく船いさうく 聖蝶

後しう先御いよ鴈の色 石龜

佛やふりる當ちあつりて 志等

物中思代了おく心をかき 志願

大津ハ町 ちハ追分 扇二

花曇るは秋のやうなる

壺丈

酒の酔きう若草のうら

拾可

人志をとりて登るは

縁

かね持の鼠の傍の京れと

房

鐘のひびくは切きさ

竹

伯母の律儀さみや言傳

如

つとて御霊祭に懸るは

蝶

あふは秋のやうなる

千

夕月此朝のゆけり白檀

等

出せける苦はなほ戸

龜

葛^{ニウ}切ふとて高き葉は

二

けふハワチきくちうぬ

頤

俳諧は花と中ふ下なりや

可

教を道と百ちと

丈

世乃中を療ぬお花あり雪此弁

試中

きよし彩うさう守明の埋火

五原房

方別此袋柄了ハ巾はさ高

其麦

悟いとりのう人忠疵也

古龍

いさひ危れ幸月忠登り船

八亀

踊乃沙法とち撲のさごと

傘下

竹年心来えんれ秋も好

房

柱一層了見れ事々あふ

中

後合も大うこおまてお合梳

所

々麻相此上志了れハ上ハ塗

麦

馬場の名を柳様よとき史て

下

都志喜と錦乃小路

疵

出代も好法乃本履目ふ知了

中

一家うら此去く了入道

房

乳書續くよあ〜き〜ひま

麦

ふふ志急此ま〜さ先ねやら

下

何ふまでおれり雨もないうまやふ

飛

月も木もめふ祝く神垣

座

色音なりう萩此上風萩の寄

房

丁と〜いも守ら〜ハ唇汁

中

^三曲尺此子小持佛乃氣の二枚折

下

か〜竹さ〜ハ日此寄ふと

麦

人音此了れ〜了了さへ花の翼

座

笑れなりう 笑ふ元山

下

月も今入暮おろし〜待き〜哉

維烈

おけのハなき〜又六〜明

桑房

言竹の煙ハぬ〜兀く来亦

一字

むすよの神も浅ハ牙なり

如見

確より取廣き乳 人さ〜仍

以亭

あ〜〜此煉〜泣多〜なり

朔二

雲此花ちりむふ浪志ふ多於

千箱

あけおのち〜夕暮ハ乳

立雲房

西行も仰走と詠了出を〜色く

菊兔

人中見〜乳 彼〜山〜

路十

名月此男不 初甞乃涉聖川

左長

野分此電〜立〜く煙けく

李川

李川

新波津や芦ハ枯ても梅の花

雪ハちり冬と繁一多

手習此君ハ物毎いといふ

撞色遠寺此窓り撲雪

十六夜志孰も尾上り入いりき

笑哉わろ才梅ハ鴉 鶴

左長

菊兔

蕪文

子箱

紀六

悟一

毛梅も分ちり花て小春ノ卯

人月も柔もかき叶もれハ

世と於と嘘り山居も飽り来て

役もてちり昆布ト芝ト糸

九月此由さる月も匠ハい歌

考此由さる衣志水張

左長

菊兔

左長

令五

百雄

其石

石の葉は持たえたりけきの香

みくらわをこむてむ石

五葉房

学問の貧乏の事とたのしんで

且賀

茶賣もかたり 永カを扇也

も麦

秋も実り久し月此片小髻廣

玉机

中拂ふやく稲乃穂まら

ま鹿

清洲 琴五

初雪やき句て忘る朝日乳

室も牛のまゝ梅うまら玉

五葉房

に上といふぬ先くく正事して

一張

芝居は好かれお乳の人

琴五

徒もむ了踏ちりけく大和橋

全

店も度ヶときけち

高

一張

城北連中

可龜

等々此功徳も積ぬを念佛

賣らば早く来候年此日教も

唐物志同屋ハとの入組と

丸袖多し者小者口外人

白少く和井此存乃功じくえ

本茶も野分と云く如静さ

其書

三巻

巴石

柏翁

宜肇

枯出乃子稱此初穂と餅うて

大工多し名書の名火さ

身とらう寸修竹ふ溪と九十九里

鶴了と云くむ波此端身

う度り菓子も花子も刺拵て

負ふう川琴ハ茶云ふり也

胸金と云んえと祝のりハ壺水

田舎此月う京を足引く

義孔

壺中

龜六

竜

石

甚

警

栢

まくり風と薫りく簾う

中

鞠ううと少描も急やら

六

宵月十日知と所る花燈の

孔

是も錦忠徳信と防風

枕巻

各詠

風中の風棟よのうねや歩幟

三巻

一蹴ハ嘯あり残れすこゝれ哉

義孔

蒼蒼る斬りなりこ此虫ノ那

巴石

雲此幸狂ふや妹乃立すう

亀六

孰化仰よけり振まは編ノ那

可竜

朝飯と碎きして戻る月尺ハ

全

五十回忌

若手署

東武連中

奥貫

魂来ませ宿ハあれても月々雪

花をぬりハこれの水仙

心牛

市人志願々 八百八ふりて 柳居

山一もちつき 湊也けり 老魚

象造と去秋もろく 建也一 心流

けしと糸一多石此玉やう 白雲

物一誰やらし似て色ろく 白玉

立居もろけと蠅此ろくも 電石

各詠

あゝ庭いふ佇まれ 結あり菊の花 田社

風去きて仕旦よや 跡乃錦 文尺

正由れ道ハ川もろく 時白く那 許人

道此実やちろく 一とくハ水の音 菅子

五十年ろろも 差此枯坐くれ 催種

吹鐘やろハ 庭ろく 木乃花の山 全

源川長き寺まで

白おしけよと此 寺ろくハ 柳よろく 白主

花を先ても音此あななくハ 東武 五雲

此依る孰とく是も所標り那 全

葉銘既うらん此蘇乃嘆より 全

あつゆふハ蝶とも見まゝ一寄此花 全

笠もほり花中にもまへと寄は時ハ 菫色

郭云 中目く 志初音くれ 全

花と見想星とあはしとけよの月 全

川風ととくありく少くれ 全

森と爰此柱うまきき極くれ 五明

筆や大道ふさく納下坊 全

片ワ水の海よのうてとりの月 全

初雲れり山けきより筒舟はく 全

待たかときと情をけり庭此花 事足

淡く啼名となけしよ郭云 全

たて出守もおしや森の村忘れ月 全

管箏とまなく見るとはけり寄此音 全

ほととぎすぬけくつかり 笈 枕 武列鴻巣 柗儿

きいとくはなす葉の竹葉見分 全

十六夜やれ志言ハ 拭ふかと 兔秋

昼中と思葉さうりや百合の花 全

草北戸のうちふ子星此月見うね 危陵

深志花や風よ香のたふ咲ん 全

又月と先へやけく 丁志色 柗儿

種 瓢きいくりや初一とま 武列峯凹 峯士

麻 追志声もきくむやんくはく 同 徳往

開了川も一富士かみんぬ月を 相列三崎 柗也

石竹よりけりくと玉や象の玉 同 芳方

さきや竹此志をく志程と啼 羽列采沢 僧一方

飛乃目や蝶も娘此おはくうん 同 執中

つよき寸小長者やきや草牡丹 越後糸魚川 古隣

くむ寸や子星乃寝も藪となり 全

美志あふ侍のさす為葉哉 上総武士村 壽射

胡弓好ク人此そらや殊此名 京 富鈴

名月や陶けりユミを幾 同 子園

伊勢山田

市部さや筆とく青も秋の宵 牡菱

空此夢よりさえきり雪佛 文水

那雲も鏡ほりし乾のテク那 芦舟

牛小原よと縁ゆけり枕の花 鬼口

けと田此二階は山 冬月 素道

とう整みく

三月も廿日大仰や山さくら 乙中

菊此日乃礼義も乃ぬ山路哉 鬼士

東武連中

小原女も是袋ふ雪結此花足哉 秋礼

陰とらと置ふけりやいのわり 右道

お住持も及ハぬソ秋やから山をこ	朱雁
若竹や凡も親よりゆつり抱	午月
精吟志帆ふけく出たりけさの秋	珉雲
舟賃も露浪出すや又忠川	竹外
水仙も素乱て「那」君の朝	巨鈎
仏さゆと智らん冬志とて	栞居

冬之部

東花坊

湖志加英小寒し比良此皇	
足より橋ハのりて枯野う那	麦林
名守ハ肩ふれりて身子うれ	月夜居
「好啼」おなきは夜々千鳥哉	六之庵
お苗ちよて「戸」 ^{タテ} られぬ鳥居哉	童平
噓乃李うささえり枯野うれ	而阿

冬々冬と隠し方限や廿日と
 傘此夜光ハ十夜、きく架うれ
 寒深の藤相なうとも枯うれ
 暖簾下は此出入や多ひ寸後
 戸ハ今蓋りり啼とうり花
 から腋此佛ふちうり寒念佛
 酒とさき舞も吹草フイユすつりうれ
 ともおち夜ハともおれ志賀の松
 不三
 阿文
 十阿
 其推
 先二
 及高舎
 廣元坊

風此神もけふハるちて小春分
 小春うハ子の日色待す大根川
 子此藤入あらやまハ巻て障紙
 座禪より火爐ふさくれをサカ
 月も暈下おしかなき時あるれ
 令度此陰り多猶や冬去とて
 け折く時多きも枯聖く那
 ハ景残むともふきりけふの音
 其麦
 全
 菊危
 蕪文
 李川
 笠都
 子翁
 ハ亀

冬もまじりて此岸よりあう那 近光
 き声や楊や船との叫り合 嵐百
 ちりおのりて此岸や橋をきき 悟一
 琴こく胡やまじりて此岸花 赤狂
 蕨子花小町としてや霜乃菊 其石
 風や星を照くや 卜陽
 臺より竹も若見よ起す小けり 似水
 水も此岸からあうん町をうれ 七通

考狩や峯も雲此一峯 坡立
 こがしやぬけく二王門 海宇
 岸松り風をのこして出るれ 百雉
 草くれや一際きりき伽藍石 一字
 烟はらや雪此月夜と啼鳥 路十
 砧より納豆此音のをり哉 全
 風やちきれくく一の色 津く
 おあけと流るるはまよふれ 傘下

先へり毎ハ拍不すけり耶

晴竹

けり言此白ひてハ年一森の花

秀縁

風名吹あまてや麻此角

市紅

新水雨矢作此橋と羊分と

風子

一七いり守中夜乃樹くれ

普東

朝顔ハ羨ハかききり花の花

采布

翁

たう或口色貯きと如雀之卵

野鳥一枚りききり時

茶坊

佐保姫とありふ出茶屋をらひて

阿文

古き川とよき是くろく此竹

伯葉

声も直方乃不ろく也

牛房

首途いふ大さやう日此初年小

米布

おろす伊ろす此子分限考也

岩龜

方明乃氣きろくくと作事小屋

六阿

瓢井ふとり又る不意味よし

鹿狂

^ウ控鉢よ出れと持て来は秋ハ

有之

左やう風れど控て置ても

葉

朝起とすれは且那も折しまく也

府

釣瓶乃等うかきろく也

布

禁くろく辰く美と嘆のふせ

毒

長く如きり夜も日御も

所

考や冬ハ漸ク去ル琴

谷々麻とあけく雪水

花野ノ陽一分限此處も来て

啄ハ夢ハノ胆かこけり

葦野の月ハ笠をく女子連

都ハ秋乃西ノ暖家迄

其表

葦野

傘下

坡立

葦野

葦野

夢もし、雪ノ根此おれ橋ノ那

雪雀足と今月ノ夜子

才宝ノ孫ナ草併喰あきて

巨々れり草此床柱あり

月此ノ誦る子尔葉おつらちら

山田此水忠階子あらし

八巻

葦野

七表

葦野

葦野

傘下

青瓦

神棚乃下也替志あしり

あし葉花もけふの朝日 青瓦

外柳匠もいさ名と風中此をよきて 坡立

宗柳れ顔もあつたるも 善本

月もすこし縁係れおれ此をよきてん 千麦

白道江をよる乳麦 吟 八巻

傘下

長しそ八酒了右明さるる卯

移もろく色了あつくまこれ 青瓦

急す子猫も行健あささく 善本

橋うつ里おもらひ廊下也 八巻

入海よせく涼い風も来る 坡立

寺方丈此相了ほつる火 千麦

林く明くおもありと松

音東

きくく如難れ声小房の戸

音房

青苔くやけのなれききりて

八巻

瓢乃やうれまきく川けり

七巻

月影く雲と見えれを佐田堤

傘下

秋いれ時のまりり柏子木

坡立

悠のないうまのまきり巖外

坡立

むくりま軍馬の組志新巻

音房

口ろ房は都北辰己春くみて

音東

出りまよれ人けりてい

傘下

半分の響く節まよふ月け影

八巻

風もあさけの響く響きのきり花

七巻

笠都

美那杯の橋とくけて白猫の意

情やうき此教ま擬お

上原房

器人此さりしと毎のちりりて

菊念

のきおくはうりもてぬら事

千第

一むく秋も半ハ乃中此久

藤文

かうんさ不れきうらハ月

路十

紀六

一重ても瘦月を足す桃此花

節句此をれと月もおろ肩

上原房

祇園う灯とを在れ日もきうく

菊念

羽織ハ肩了お結とやうく

悟一

續うり小我々身此上と之下り

百雄

名も最原うそ 長ハ暖簾

左長

左長

蝶くも是にまゝすや草花係

草花

まぬれの花は月を照るけしは

出伏了命婦此官を下りて

菊心

牛は思ふより早くを信

笠敷

名月と物さへさへく菌時

記六

稲刈すも里志如の人

子象

路十

天井了結の何まりや花

胡蝶乃舞ハ風中よりおれ

草花

縣下世界ハ具負くこと

菊心

ほろくむより見ゆ人け

百雅

多れ声なき川月を照けし

李川

けしきすれをやせし草花

悟一

城北連中

似柎

芥抱と人も見よとあし極

うたはる喚子亦う雄啼

尚書からし夏と隣のをわけて

待て茶をるの番ハかろ也

そらりくとと一ふゆるれ宵月如

うつろくすやと和栗乃刈ろ

素片

卧雲

歩月

一笑

丹竹

涌の流吹れてありふ秋の風

罪もけろと怒走ろろわむ

神さる一月籠きあむ代まひり

くまろいとく餅搗の音

年此夜まらそ火燈のゆきとまり

及よく空とほは看流

針ふれ事よも針の送者好

唇風よふける小ねれり籠

風頌

呼友

籬菊

柳

月

電

竹

笑

久世了古今此情の思まに半 友

舎一より時喰へよふ山と 頌

村而此節も異さハとくの候 柳

月此田毎も今二番草 竹

そり立てさ何ぞ折敷と辰なま 笑

せりい中へはまひ思りま 友

さくやく小邪ハれ戀と是てわしハ 電

ま外れくも体むお度 月

考此色ともなぬ身此節ありけ 頌

風もほくくも) 松忠友浪 物草

各詠

夏瘦や多お繪り似方親法師 昔月

月やたうしと御も満る十お小 似柳

水多のそ孫ハ下ても常く耶 新竹

子し女の裾ハ深れ花咲けり 一笑

呼友

風頌

松巴

卧雲

岩倉連中

以鳥

磨之此種ハ游子也摘来クハ

長く是し人此事ハ口ハ 立寄房

何やや火煙志多(も)漸(う)て 過溪

あふひちりく小猫ハ寐也寸 梅枝

月と満(る)月志やくと春あはし 棹危

肌寒(る)や乳とぬくのし 和之

各体

梢(く)松くや見てやこ(り)る 色溪

毛體ハ表(と)し(り)も(り)花跡ハ 和之

咲(と)い(ふ)と(な)り(先)や菊乃花 以鳥

宿止日此川能はるり水車

智多藪
桃野

夕此暮や高此止これ朝朗

全

くむ人とも尺八吹き

其由

聖借とれよ

朧と曲く松ちるや百合の花

全

白魚やちり生れく取揚るき

横須賀
白水

名月や山と流る熱る此底

白塗

一刷毛の中不執とく喜田これ

楓京

喰れき乳草も枯や馬此骨

寺水
句謂

光涼るくきゆす草のあ

南野
草樂

有明此朝るけ色く一葉哉

熱田
一霞

ほいきけよつまさ此敲く柳外

清洲
琴五

鬼蓮乃強ふけきり異りか

全

春との香は輝き川や魚の店

全

脊之部

蓮二房

山梅とれう花雪や啼かす
 勤くきののむく柳う那
 紡績のとれ切く庭う重崔分
 実和やまれ月脚のまたうり
 朽むよも亦九月れ派せう那
 飯肴や入道の志のきくぬち
 出代も訓傑う律いく斬う那
 百根 維烈 梅儿 病氏 楚中 孝房

夢ろりまやうりす 軒端か 関士
 すえ搭ふあよ運人や雛まつり 吉屋
 ちりハせくほりりくと椿う那 李運
 ことりうけ出さきけり 猫の志 百雄
 道草れつこ葉や馬れ通うち 應宇
 海棠と実うおるまて眠りけり 善東
 山吹や日うへと水ま久 悟一
 あとむよも往年ふなる橘葉分 竹郎

苗代や水よも多き世てまは 兼雨

又ハ此不沙く淋し 推月 之推

様色出く塔供養方彼岸ハ 采布

児此子此そくや若此胡さく 迦交

我尻の居へ不形し 田中一取 坡立

宵此帯しと明ふけりよさく 八亀

うけ海よや並く燃る畑の薫^{ユエ} 路十

畧を此嘆分ありや森乃花 蕪文

糸ハ之れ流るりよき所柳うれ 十河

去年此去巻や置り残る雲 龍百

は才つづく見若ふより楊重崔 本正

寄もつる不月し篋巻て四標取 左長

赤飛くや人と落さるよ 瘦る時 季川

髪巾ゆくけふもこれす 柳うれ 笠都

ハを此名も人よりハの十歳外 全

り書や起と都乃名りのり 紀六

菱花喜小猶乃見五寸梅りれ 壺丈

ちり時も伊達と崩さぬ梅り那 甫千

曲水名あつひの清し梅り此 子箱

言せし不けりえて戻るむとり分 傘下

し香やよこ道にありくる雨の中 傘下

春喰ひの奢ハ初るす素此花 其麦

娘ハもこの上も青し草此候 全

花梅や擬木此智恵もはかり 菊鬼

